



No. 189

ティークレイク

## Tea Break

ずっとリンク

会員 正林 真之

「金魚の愛」というような話が、あるとき大きな話題となったことがある。どんな話かという、一緒にすくわれた2匹の金魚、デメキンとフナキンが居た。そして、デメキンが弱って水面まで上がれなくなっているところを、もう片方のフナキンが手助けをして、水面に浮いた餌をデメキンに食べさせるためにそのデメキンを水面にまで持ち上げているというのである。

テレビのワイドショーでは、「微笑ましい金魚の愛の物語」として報じられていたが、当然のことながら、魚どうしに愛など存在するはずがない。あの程度の脳では、それは実現しえないのである。

では、なぜそのような現象が起こるのかという、金魚というのは、群れの全体を自分自身のように一体化する習性があり、それがそうさせているのだという。なので、かのフナキンにとっては、かのデメキンは自分のからだの一部なので、それが餌が欲しいと思えば、それが餌にありつくように行動すると、そういうわけなのである。なので、フナキンは、デメキンを助けているというわけではなく、自分のためにやっているようなものなのだ。これを学問の上では、自分の本来のからだを超えて拡張して感覚するというので、「拡張感覚」と呼ぶらしい。

これに関して、脳科学者の黒川伊保子先生は、「この“拡張感覚”というものは、男性の脳のほうが女性の脳よりも遥かに高く、そうであるがゆえに男というものは、バイクや車などのメカや道具を、自分のからだの一部のように感じるものなのだ」という。「なので、男たちは、車やバイク、果ては日曜大工の道具なども、そこにまるで自身の神経がつながっているかのように自在に操る。男女差についての色々な意見はあるにせよ、これ

は男性脳に特有なものなのだ」という。

そしてまた、黒川先生いわく、「このような男という生き物は、長く一緒に暮らした女性を、その能力を使って、どうも自分のからだの一部のように感じてしまうようなのだ」という。「なので、自分の右手をわざわざ褒めないように、自分の妻をわざわざ褒めたりはしない。また、自分の右手に「愛してるよ」などと言わないように、男たちは妻に愛の言葉を伝えない。」ということである。

けれども、「拡張感覚の低い女性脳は、相手が自分のからだの一部なんて思わないし、彼はいつまでたっても“相手”なのだから、夫からの愛の言葉の“絆”を欲しがるのである。」ということなのであるけれども、誠に不幸なことに、男のほうにはそれが分からない。

もちろん、「女がそれを欲しがるから、それを言ってあげるといい男（というか、気さくな男）は存在する」ということなのであるが、健全なカップルがそのまま生活を続ければ、男性脳の拡張感覚のおかげで、ごく自然に、褒め言葉や愛の言葉が無くなってしまいうわけである。

「男性の絆は一体感」、 「女性の絆は個別間の共感」ということになるのかもしれないが、黒川先生は続ける。いわく、「女は、褒められたり、癒しのことばをもらったりしながら生きていくことを「愛の日々」だと思っている。なのに、男は、慣れ親しんだ女を、自分のからだの一部のように感じてしまうから、わざわざ言葉をかけようとしなくなってしまう」ということである。けれども、その効果の一面として、男というものは妻に「先立たれたら、からだの大事な一部をなくしたかのように、弱って死んでしまう」ということである。

こういった話を聞くにつけ、思い出すが、私の母方の祖父の話である。祖父は心優しく、それでいて体が極めて頑丈な人で、本当に長生きをした。その祖父が亡くなった直接の原因は、彼の配偶者である祖母を亡くしたことである。祖母が亡くなってからというもの、彼の風体はまさに「魂のぬげがら」とか「生きるしかばね」といった言葉が本当にぴったりとくるような、そんな有様であった。

泣くわけでもない。怒るわけでもない。かといって、笑うわけでもない。ただただ無表情でぼおっとしていた。そんな感じである。それがどこかを見つめているような、それでいてどこも見えていないような、そんな感じであった。まさに、先の「弱って死んでしまう」というのが表現としても的確である。

こんな祖父が亡くなったときには、親類の誰もが、大変に悲しむと同時に、「お祖母ちゃんとまた一緒になれて良かったね」と、口々にそう言っていた。その頃にはまだ独り身であった自分には、その意味が殆ど分からなかったと言ってもよいが、祖父は、祖母を亡くしたことにより、自分の人生の大部分が、というか、彼の体の大部分が無くなってしまったのだ。喪失感ではなく、喪失してしまったのである。

さて、特許事務所の中には、夫婦がコアとなって経営しているところも少なからず存在する。実は、お隣の中国では、弁理士が3人以上でないと特許事務所が開けな

いので、夫婦がコアとなって経営されている特許事務所というのは、中国と比較した場合には、日本固有のものとなっている。そしてまた、こうした特許事務所の中でも、上手くまとまっている事務所ほど、奥様を亡くされたときの廃業率が高いような気がする。

そしてまた、こういった事例を見るにつけ、思い出すが、先の黒川先生の「男は、慣れ親しんだ女を、自分のからだの一部のように感じてしまうから、…先立たれたら、からだの大事な一部をなくしたかのように、弱って死んでしまう」ということである。そして先生は、「女の愛と男の愛で、どちらの愛のほうが深いのだろうか」と問いかけた上で、「女の愛というのは、人工知能によって「ふり」をすることはできるが、男の愛というのは、人工知能によっては実現しようがない」と結んでいる。

ところで、拡張感覚の高い男性脳にとってすれば、彼の妻だけでなく、長年にわたって経営してきた自分の事務所も、彼のからだの一部のようなものである。妻に先立たれて早々に廃業する様子を見るにつけ、そして、今の弁理士業界における事業承継の問題を見るにつけ、根本の原因はそこにあるように思われることもあるのだが、ときには、たとえ世の中のためにならないと言われてようとも、承継が上手くいかないことのほうが却って幸せなのではないかと、ふと、そう思うときもあるのである。